2008年度（第10回）学生懸賞論文「女性学インスティチュート賞」

総　評

渡　部　　充

「女性学インスティチュート賞」に今年度は３本の応募がありました。最優秀賞に該当するものはありませんでしたが、２本の論文が優秀賞に選ばれました。望月智代さん（I04413）の「女性誌セックス特集における女性の性―『セックスできれいになる』からの出発―」と、澤田さゆりさん（I04460）の「代理懐胎―法学とジェンダー学からの分析―」です。以下、選考委員の先生方の講評や、選考委員会での議論を踏まえ、今回応募された論文の紹介と講評をまとめておきます。

優秀賞を受賞した望月智代さんの論文、「女性誌セックス特集における女性の性」は、女性誌『an・an』を中心として、女性誌のセックス特集を分析し、女性の性についての認識の変化を探ったものです。女性誌における性の取り上げられ方は、男性誌におけるそれとは一線を画しつつ、時代に応じて、女性にとっての新たな性のあり方を提示してきたこと。同時に、それらは男性誌における性規範などに縛られている面もあること。そうした枠組みを乗り越えていくことの大切さなどが論じられていました。文章が秀逸で、大変読みやすく、興味深い論文でした。また分析もジェンダーの視点を取り入れ、女性誌の提示する性のあり方に対する批判的なまなざしも鋭いものでした。

しかし、以下のような問題点の指摘があり、最優秀賞にはいたりませんでした。『an・an』がどの程度女性誌一般を代表しているのか、あるいは女性読者の性に対する認識を反映しているのか説明や議論がなかった。確かに同誌はセックス特集で注目を集め、女性の性の解放に寄与したのかも知れません。しかし、特定の女性誌を中心に取り上げる理由や意義についての説明がほしいところでした。時代区分についても十分な説明がなかったように思います。なぜこのような区分になっているのか、それが現実の女性たちの性認識や行動とか

かわりをもつのか不明でした。学術的な先行研究に対する言及が少なく、雑誌や一般の書籍に依拠している点についても指摘がありました。

もうひとつの優秀賞論文、澤田さゆりさんの「代理懐胎」は、代理懐胎という極めて今日的な話題を取り上げ、法学とジェンダー学の視点から分析を試みたものです。代理懐胎をめぐって現行の法律と照らして、どのような問題が生じているのか。また子供を「『産む』ことから自分の子を『持つ』ことへとシフトしている」女性の意識の変化について問題提起がなされています。そうした新しく、かつ奥行きの深い問題に取り組んだ姿勢が高く評価されました。全体として説明が丁寧で、明晰に議論が展開されていました。

しかし、いくつかの問題点があり、最優秀賞には該当しませんでした。副題「法学とジェンダー学からの分析」に示されているように、方法論的に欲張って、それぞれについて十分に検討されていないような印象を与えました。法的な問題については諸外国の事例について比較検討するべきではないかとの意見もありました。ジェンダー学的な分析については、参考文献として挙げられている研究が必ずしも咀嚼、反映されたものとはなっていませんでした。代理懐胎を選択する個別の女性の判断、価値観などについても吟味はなされず、やや公式的な「女は子どもを産んで（あるいは持って）一人前」という社会的な圧力に帰していたところにも注文がつきました。

今回応募のあった、内田千晶さん（H04808）の「女子大学生の持つ性差感と異性接触の関連性―共学と女子高出身者の比較―」は異性との接触と性差感の関連を調査に基づいて分析した興味深いものでした。先行研究に触れ、実際に調査を行い、調査結果の分析や、残された課題についての論考もすすめるなど、一定の評価は与えられるものです。しかし、多くの重大な問題点の指摘があり、受賞は逃しました。女子の場合、性差感に学校環境はないという研究を紹介しながら、性差感と異性接触との関連を論じようというものですが、「共学と女子高」の比較にも目を向けようとする論理が不明でした。異性接触と出身校の関連をどう考えるのか、考察が不十分だったと思います。また、統計的

な手法や用語についての説明が不十分なところや間違いがあることも指摘されました。

以上が、今回応募してくださった方々の論文です。一昨年の応募が10点、昨年は4点と、減少傾向にあるなか、本年度は多くの方々に奮って応募していただきたいと願っていましたが、非常に少ない応募数であったのは残念です。しかし、論文3点中の2本が優秀賞に該当する水準であったのは喜ばしいことと思います。2本とも選考委員の中から最優秀賞に推す声もあり、例年の優秀賞と比較しても良い出来ばえのものだったと思います。

来年度の応募論文が、論文の本数という量、各論文の内容という質、共に充実したものとなることを願っています。

(女性学インスティチュート学生懸賞論文選考委員長)